「天竜びと」と遊ぶ夏

天竜川には自然がいっぱい

「天竜びと」と遊ぶ夏休み

天竜川は四季折々の表情を見せて私たちを楽しませてくれますが、川の水が気持ちよく感じられるのは、やはり“夏”。今年の夏休みは「天竜びと」と一緒に、川で遊んでみませんか？　新しい発見と感動がきっとあるはずです。

天竜びとが語る「水生生物」

川で遊んで、虫を調べる そうすると川の環境が見えてきます

久保田さんは（株）環境アセスメントセンターにお勤めで、12年にわたり天竜川の水生生物調査にかかわっているそう。県の自然観察インストラクターとしても活躍中です。

●伊那谷自然友の会会員
久保田憲昭（くぼたのりあき）さん（飯田市在住）

川にはいろんな虫がすんでいます。流れの速い浅瀬にある石をひっくり返すと、石の裏にヒゲナガカワトビケラや、カワゲラなどの水生生物がたくさん見つかります。ヒゲナガカワトビケラは、伊那谷では昔から佃煮などにして食べられている「ざざ虫」のことです。

私は子どものころから天竜川支流の松川でよく遊んでいて、「川のなかにこんなにたくさん、いろんな種類の虫がいるんだ」ということを知り、川の虫が好きになりました。今では天竜川をフィールドに水生生物の研究をし、毎年夏になると観察会に参加する子どもたちと一緒に川の虫を調べています。

たくさんの虫を見て目を丸くして驚いたり、最初は気持ち悪がっていても、しばらくすると「ヒラタカゲロウがいた！」なんて声をあげるようになったり、そんな様子を見ていると、とってもうれしくなりますね。「自由研究にしたい」といってくる子もたくさんいますよ。

水生生物を調べることで知ってもらいたいことがあります。見た目だけではわからない川の水質がわかること。川の虫にはきれいな水にすむ種類、汚い水にすむ種類などがあるんです。最近注目しているのがカワゲラ。きれいな川にしかすめないカワゲラが、天竜川に増えてきているのです。

「川をきれいにしよう」という言葉も、実際に川に行ってそこの環境とすんでいる生き物を見ると、感じ方が変わります。水遊び、虫探しを通して環境について考える。この経験をした子どもたちのなかから将来、研究者が生まれたらうれしいですね。

石をひっくり返すとたくさんの昆虫が見つかります。観察には特別な道具は必要なく、網と虫を入れるバケツがあればOK。ただし、石の上は滑りやすいので、靴底は滑りにくいものを。

「カワゲラは松川町から飯田市の松川合流点付近でたくさん見つかります」。

天竜川上流河川事務所が主催する観察会では、本流・支流合わせて12地点を6日で調査。参加者は延べ400人にのぼります。

観察会では、写真見本と比べながら、形やそのほかの特徴を見て、どんな虫がいるのかを調べていきます。

天竜びとが語る「自然体験」

秘境の川だからこそ 夏は、子どもたちの教育に最高の場所なんです

河川レスキューの国際資格を持つ佐藤さんは、安全な川遊びの極意を知っています。天竜川のラフティング大会で優勝したこともある実力派。ニックネームは「だーっ」。アントニオ猪木のファンだとか。

●NPO法人グリーンウッド自然体験教育センター
佐藤陽平（さとうようへい）さん（泰阜村在住）

毎年、関東や東海地方などからたくさんの子どもたちが泰阜村にやってきます。そこで子どもたちは、大きな岩をすべるウォータースライダーや川の流れに身をまかせて下るリバーフローティング、カヌーなど、いろんな遊びを川で体験します。

子ども山賊キャンプで体験できる天竜川カヌー下り。「自然のなかで過ごす経験をした子どもと、していない子どもでは、価値観がまったく違ってくる」と佐藤さんはいいます。

岩の上から川に飛び込んだり、手づかみで魚を捕ったり、昔の暮らしが残る天竜川らしい遊びもたくさん。そんな体験ができるのは、「めちゃくちゃきれい」な渓流や、川遊びにぴったりの小さな川、ゆったりと流れる大きな川、そしてそれを取り巻く豊かな自然があるからこそ。万古川や和知野川のように、「秘境」といえる場所もごく身近にあるんです。地元の方は「何もない」というけれど、ここには宝があると思います。この財産を子どもたちの教育に活用させてもらっています。

川には危険はつきものです。だからこそ、どういうところが危ないのか、どうしたら自分の身を守れるか、自然の怖さをきちんと知ったうえで楽しく遊べるように、子どもたちに伝えていくのが僕たちの役割。大自然のなかで遊んでより自然を好きになり、環境についても学べてしまう。ただ「自然がきれい」だけで終わってしまってはもったいないですからね。

グリーンウッド自然体験教育センターは、山村留学の子どもたちが生活する「暮らしの学校　だいだらぼっち」、地域の子どもたち向けの「あんじゃね自然学校」、研修棟、コテージ棟などからなっています。自分で割った薪で沸かす五右衛門風呂も。

「ブカブカキック」とは佐藤さんが考えた川の中での危険回避法。水のなかでは立とうとせずに足を下流に向かって浮かせ、岩にぶつかりそうになったらキックする。わかりやすく教えたいという佐藤さんならではのネーミングです。

天竜びとが語る「リバースポーツ」

都会へ出ていたこともあるそうですが、地元が忘れられず戻ってこられたとのこと。地元を素晴らしさをPRしたいそうです。

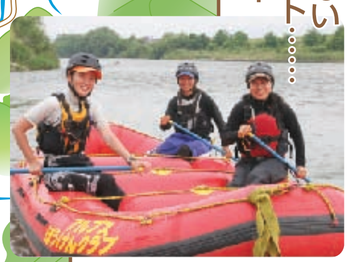
●リバースポーツインストラクター
今牧愛（いまきあい）さん（飯田市在住）
松澤南（まつざわみなみ）さん（飯田市在住）
小林彩子（こばやしあやこ）さん（飯田市在住）
※写真左より

一度体験したらやめられない ラフティング、ダッキーボート。 来て、見て、川を楽しんで！

天竜川には四季折々の楽しみ方がありますが、夏は川で遊ぶのがイチバン！　水しぶきを浴びながらラフティングで川を下ったり、マイナスイオンを感じながらのシャワークライミング（沢登り）も気持ちいいですよ。私たちが勤めている（有）アルプスぼうけん組楽部でのラフティングは、流れが少し急な所を下りますが、初心者でもOK。ダッキーボートは天竜峡界隈の流れがゆったりしたところを下るので、家族連れやカップルなどに人気があります。

私たちの友人が「飯田には遊ぶ所がない」と言うのですが、実は遊び方を知らないんだと思います。遊び場所がないのではなくて、目の前にある川で遊べるのですから。みんなで力を合わせて漕いで楽しむラフティングや、子どもも簡単に遊べるダッキーボートなど、川でできる遊びはたくさんあるのです。まずは一度、体験して楽しみを感じてください。怖くないですよ。私たちインストラクターが、川の危険をきちんとお教えしたうえで皆さんをしっかりガードしますから！

川遊びを楽しむために、私たちはラフティングをやりながら、ボランティアで年に4回、川の清掃をしています。汚れた川では遊びたくありませんから、みんなできれいにするんです。また、外来植物アレチウリの駆除活動も行っています。皆さんもラフティングを楽しみながら、川をきれいにしてみませんか。



今牧さんをはじめとする（有）アルプスぼうけん組楽部のスタッフが川で遊べるスポーツをナビゲートしてくれます。

ラフティングの本場、ニュージーランドでラフトガイドの国家資格を取得されたそうです。

ヘルメットも大事な道具のひとつですが、キャップは顔の日焼け防止。手に持っている物はボートを繋ぎ止めるものです。

インストラクターのライフジャケットには救命道具が入っています。これは「スローバッグ」という投げ縄。おぼれている人がいたら、シュッとひと投げして助けてくれるのだそう。

※川に行く時には、川に詳しい大人と一緒に行く、あらかじめ天気予報をチェックするといった注意事項をよく守って、安全に楽しく遊びましょう。

天竜川の語りべ

三六災を知る人が少なくなったいま 災害の怖さを語り継いでいきたい

●大鹿村前助役　峯沢守（みねざわまもる）さん（大鹿村在住）

三六災から今年で45年。当時私は、役場隣の病院に勤務していました。忘れもしない6月27日の午後、雨が一段と激しく降りしきるなか、手術が行われていました。手術中、停電になり、慌ててみんなで懐中電灯で照らしながら手術を終えたことを覚えています。

大西山が崩れたのはその2日後。仕事に向かう途中「今朝はやけに大西の落石が多いなぁ」って立ち話をして、しばらくするとスーッと川の水が少なくなったのです。そしたら、馬や牛などの家畜が流れてきました。それが大西山の崩壊だったんですね。大西山が崩壊した様子は、「何だこれは！」と、言葉に表せないほどでした。辺りには亡くなられた人や、大勢の泥だらけの人、なかには足に竹が刺さったままの人もいました。

この崩壊で42人の方が亡くなり、広い水田も泥に埋まりました。この災いで村からの集団移住も相次ぎ、人口もすっかり減ってしまいました。災害の傷跡も復旧し、治水事業が進んだおかげで、安心して生活できるようになりましたが、今後も災害はいつ起こるかわかりません。災害の怖さを知り、地域をどのようにしたらいいのかを、大人も子どももみんなで考えていく必要があると思います。

三六災を知る私たちがしっかりと語り継ぐ、それだけは続けていきたいと思っています。

大西山の崩壊によって破壊された小学校。奥が校舎、手前が体育館。この災害の悲惨さが伝わる貴重な写真です。

大西山の崩壊によって多くの田んぼが土砂に飲み込まれました。上が災害当時のようす、下は現在の大西山。現在は桜が植えられ大西公園として整備されています。

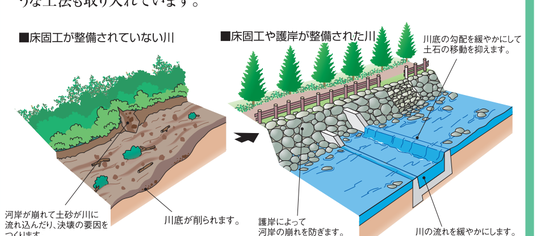
知ってナットク なるほど！天竜川

「床固工」って何？

床固工とは、勾配（こうばい）が急な河川を横断して、階段のように設置された構造物（こうぞうぶつ）です。

床固工の目的は、①川底の浸食を防いで河床を安定させる、②勾配を緩やかにすることによって土砂の再移動を抑える、③水の流れを遅くさせて下流に安全に流す、ことです。

また、床固工や護岸工が連続していくつも設置されているところを床固工群といいます。床固工群では護岸を階段状にするなど、水に親しめるような工法も取り入れています。

大河原床固工群（大鹿村）

与田切床固工群（飯島町）